

中学受験

阿部 頼 政

日曜日の朝8時、お茶の水駅はちょっとしたラッシュアワーとなる。ひしめきあって電車から降りてくるのはサラリーマンではない。小学生である。同時刻、中野駅、代々木駅なども同様である。

ウィークデイでは、夕方5時頃と9時頃に小学生の姿が目立つ。いずれも肩からかばんをさげて、赤、青、黄などの蛍光ペンを手に参考書を読んでいる。来年2月の中学入試を目指す受験生達である。

麻布、開成、武蔵を男子校の御三家と呼び、桜蔭、雙葉、女子学院を女子校の御三家と呼ぶそうである。この6校を軸とし、国立大学付属、私立大学付属などがからみあって中学受験の戦争が展開される。有名校の共通点は、中高一貫教育と、有名大学合格者の数が多いことがあげられよう。

学校の授業を真面目に聞いているだけでは、まず有名校への合格は無理らしい。当然、受験指導を専門とする塾の需要が高まり、それに応じて膨大な数の塾が誕生している。その中でも特に有名なY進学教室は、約6,000名の会員をかかえているが、この会員選抜試

験に合格することが難しいこともあって、その合格を目的とした塾も数多いという。すなわち、有名中学を受験するための有名塾合格を目指した塾である。

わが家の小学校6年生になる娘も、昭和60年2月の中学入試に向けて目下準備中である。日曜日の朝から夕方まで、月、水、金は夕方3時半に家を出て夜11時頃帰ってくる。火、木、土が暇だから別な塾に通いたいという娘の要望は親の権限(?)でストップした。我々大人が思うような受験生という暗いイメージは全くない。毎日嬉々として勉強にとりくんでいる。一種のゲームに参加中という感じである。2年前に受験を終えた息子は、サッカーに狂っており、夜は勉強中の娘のそばで、パソコンにむかい麻雀を楽しんでいる。両極端の日常生活をおくっている兄妹だが、本人達に違和感はないらしい。

入学試験の弊害は、マスコミをはじめ多くの人達によって指摘され、各種の改革が行なわれてきた。大学入試における共通一次試験の導入、高校入試における学校群制度や偏差値の導入である。その結果、大学入試、高校

入試に冒険は少なくなり、それぞれ自分の成績に見合った大学、高校を選択するようになった。そして今、中学受験が過熱気味であり、小さな戦士達が、しのぎをけずる争いの場に向っている。なげかわしいという見方、たのもしという見方、その他様々であろう。

日本人の教育熱は世界的にも有名である。学歴社会と言われる社会制度に原因があると見る見解が強いが、どうもそれだけではないように思える。あえて言うならば、戦後の日本人の生存本能に起因しているのではなかろうか。資源のない国、経済封鎖されれば飢える国、しかし1億人という優秀で勤勉な人材をかかえた国、この人材に磨きをかける教育、すなわち日本人が種族として生きのびるため、無意識のうちにつかまえた手段が「教育」ではなかったか。

戦後の荒廃を驚異的なスピードで克服し、今や経済大国と言われるまでに日本は成長した。この推進力が産業であったことは周知の通りであり、産業の発展を支えてきたのが高度の教育を受けた人材であったことも異論はなかろう。受験戦争に象徴される教育熱は、石油や原子力とは異なった日本特有のエネルギー源ではないだろうか。

東京の私立大学に在籍する学生の年間授業料はほぼ70~80万円程度である。下宿生活をおくっている学生の親からの送金は月10万円前後であるから、親の出費は年間約200万円となる。50歳前後の平均的サラリーマンにとって年間200万円というのはかなり厳しい負担であろう。このような大学生を2人もかか

えていたら大変である。にもかかわらず、教育熱はさっぱりおとろえていない。

数十年前は、受験と言えば大学受験が中心的存在であったが、その後、高校受験がエスカレートし、今、中学受験まで脚光を浴びるようになってきた。受験勉強を始める年齢が年々低下していく傾向にあるようである。小学校受験の塾も多くなっていると聞く。

数年前から研究室に置いてあるパソコンは、一日中、卒業研究の学生達が使用している。研究室に来るようになってから1~2週間で結構マスターしてしまう。40代、30代でパソコンを自由に扱える技術者は何%ぐらいいるだろうか。おそらく10%に満たないであろう。現在の学生達をさらに10年若くすると、今の中学受験期の子供達となる。中学校合格の「ごほうび」はパソコンを希望する子が最も多いそうである。コンピュータを覚えようとする殊勝な心がけからではない。インベーダーのようなゲームを楽しむためである。すなわち、パソコンは遊び道具の一つと化しているのである。

我々の学生時代は測量の計算にソロバンかタイガールの計算機、丸善の対数表を使用した。今の学生は手帳程度の電卓一つですましてしまう。さらに10年後の学生は、日常茶飯事の計算として簡単に片づけられてしまうにちがいない。

今、ハイテクの時代として技術革新の目ざましい例が世をにぎわしている。重いかばんをかかえた小さな中学受験生は、それらを既存の知識として使いこなす時代の有能な技術者候補と見なすことができよう。

〔筆者 日本大学工学部助教授〕